

「紳士」と「学者」

—19世紀末フランス哲学の防衛—

林 芳 樹

はじめに

宮廷社会に端を発する「紳士」と「学者」の対立は、世紀転換期のフランス第三共和政において、知識人の場を構造化する基本的原理のひとつであったように思われる¹。たとえば、哲学の学位請求論文である『社会分業論』の導入部で、次のように述べることによって、デュルケムは「学者」の立場を鮮明にしている。

「かつてあれほど称賛されたこの一般教養は、今日では、しまりのない印象しか与えぬ訓練という効果しか、もっていない。・・・かつての紳士は、われわれにとって、もはやディレクタントでしかない。そして、われわれは、ディレクタンティズムにまったく道徳的価値を認めない。われわれはむしろ、完全であろうとすることよりも生み出すことに努める人、限定された仕事を持ち、それに没頭している人、・・・そういう有能な人間のうちに完成をみる」(Durkheim, 1893, 43-44 頁)。

ディレクタンティズムを、当時、ギリシャ・ラテンの古典と同一視され、エリート層を陶冶する中等教育の試金石であった一般教養 (culture générale) に結びつけること、それは、聖なる文化に対する挑戦であった。その結果、唯物論、功利主義、社会の専横、疑似科学、術学などのスティグマが、デュルケムと彼の社会学に向けられている。有名なのは、ドイツ流学識に与する「ヌーヴェル・ソルボンヌ」に対するアガトンらの批判である(Bompaire-Evesque, 1988)。攻撃の多くは、在野の知識人 (文人) からのものであり、一般教養と「紳士」(honnête homme) の擁護を謳っている。

「紳士」と「学者」の争いは、しかし、「学者」の母胎であるはずの大学内部にも及んでいる。同じくデュルケムは、「哲学教育と哲学アグレガシオン」と題する論文において、リセ最終学年の「哲学クラス」の教育だけでなく、哲学者養成の王道たる教

授資格試験（アグレガシオン）まで、その内容を欠いた形式主義や抽象的性格を槍玉に挙げ、「頭の体操」とまで言い切っている(Durkheim,1895)。そこでは、作家や評論家だけでなく、「学者」の象徴たる哲学アグレジェさえ、ディレクタントイズムの批判に晒されている。これに対し、今度は『形而上学・道徳評論』に拠る哲学者がデュルケムに激しい非難を浴びせている。

こうして、デュルケムは、大学外部のイデオロギー的争いと同時に、大学内部の学問や教育をめぐる争いにも直面していた。この二つの戦線の収支は、デュルケムにとって、あまり芳しいものではない²。とりわけ、彼によって大学ディレクタントイズムの源とみなされた古典人文学の重みは、デュルケム社会学の親学問であり、当時、玉座にあると目されていた哲学においても執拗に残り続け、フランスにおける社会・科学の制度化を妨げている。古典人文学に代わる新しい社会の「科学」は、「ヌーヴェル・ソルボンヌ」の敵対者が批判するようには、伝統的な知のあり方を大きく転換できなかった。実証科学の名において、哲学の革新を目指したデュルケムの社会学も、カラディが指摘するように、その試みは半・挫折であった(Karady,1976)。「学派」として学問的革新を行い、外部の批判者から「ヌーヴェル・ソルボンヌ」の頭目とまで名指された彼の社会学は、大学内部において、哲学の補助的分野に長く押し込められたままであった。こうした哲学の重みは、その後のフランス社会学の展開に大きな刻印を記しているだけではない。ブルデューが繰り返し指摘するように、社会・科学に対する廉価と個人・思想の称揚は、今日でも、フランス知識人に共通の思考の前提となっている³。

この争いは、また、第三共和政の大学改革と平行している。有名なのは、中等教育カリキュラムの改革をめぐる伝統派と改革派の争いである。それは、リセにおける古典教科の独占を破るものであったが、中等教育との古くからの紐帯を維持し続けている文学部、とりわけ、伝統的ユマニテにとって大きな脅威であった。その優越的地位が、高等教育の専門化の未発達や中等教育への依存によってもたらされているため、中等教育の改革は、優越した文学や哲学の学問的地位そのものの廉価につながるからである⁴。したがって、伝統派大学人にとっては、制度の防衛と学問のそれとが連動している。そこでの隠れた対立もまた、「紳士」（一般教養）と「学者」（専門学識）の争いであった。

こうした全体的構図を念頭に置きながら、本論稿では、世紀転換期に哲学者が示した集团的防衛の一端を、第三共和政による大学改革との関連で検討したい。というのも、その防衛は、社会学の制度化といった関心を超えて、「紳士」と「学者」という、

「紳士」と「学者」

フランスにおける二つの支配的人間類型の今日的形態にも重要な影響を与えているからである⁵。

1 哲学クラスと哲学の重み

世紀転換期における哲学の重みを見るためには、中等教育、とりわけ、リセの最終学年に置かれた哲学クラスの特異性を考慮しなければならない。一般的に見て、共和国の改革以降も、中等教育との紐帯を最も強く保ち続けたのは、文学部、とりわけ、哲学の領域である。第一に、教授経歴に関して、大学教員の多くが、リセ哲学クラスの教授経験をもつばかりでなく、哲学クラスの教授と同じく哲学アグレジェであった。第二に、大学の哲学教育は、とりわけ、リセ教授の養成を主眼として行われている。したがって、哲学クラスのプログラムと高等教育の内容には、大きな切断が見られない。たとえば、ファビアニが指摘するように、バカロレアで扱われる主題とリサンスのそれ、さらには、ノルマルのコンクール、アグレガシオン試験の主題は、大きく異なるものではない(Fabiani,1983)。そこでは、哲学クラスが哲学教育や研究の主要モデルとされている。長期に渡ってリセの哲学教授職を務めたベルクソンやアランの存在が、こうした事態の継続を雄弁に示している。

主要モデルとされた哲学クラスは、他の教科と違って、中等教育の最終学年に集中している。そのことは、中等教育の完成＝戴冠(couronné)の学問という言葉によって正当化されている。哲学は、個別知識に分解され、基礎から段階をおって教授される類の専門的知識ではなく、それらの上位にあり、個人の創意によって総合や完成を導くものと思念されている。こうした学問イデオロギーは、哲学クラスの小論文の教育のうちに具体化されている。そこでは、厳密な知識の獲得よりむしろ、総合を導く「独創性」や「個人的趣味」がとりわけ奨励される⁶。こうした教育システム内での位置や教育装置が、哲学の普遍性（「永遠なる哲学」philosophia perennis)の表象を支えている。

さらに、エリート層の再生産における中等教育の重要性が加わっている。バカロレアは、当時において、支配的階級を他から分かつ主要な障壁として機能している。したがって、バカロレアにおける基幹教科としての哲学は、哲学教授の養成といった限定された役割を越え、エリート文化の基礎的要素ともなっている。そのことがまた、哲学や哲学者の威信を高めることに貢献している。しかし、この時期、共和国の改革によって、哲学の地位が脅かされている。高等教育では、「実証科学」に後押しされた学問の専門分化が進展し、学問の争いが激化している。中等教育においても、近代的

カリキュラムが、古典カリキュラムとの同格を求めて競合関係に入っている。しかも、こうした争いは、支配の正当性をめぐる新旧階級間の争いといった、より広範な社会的対立を背景として行われている⁷。

2 「危機」の言説

ファビアニの研究によれば、世紀転換期、哲学者による教育システム内での優越した地位の要求は、危機や不安といった言説が繰り返されることで増幅されている⁸。危機という言葉は、とりわけ、科学との関係で頻繁に用いられている。しかし、第三共和政の大学改革によって、クザン流の国家哲学の死が公言され、教授の自由が謳われる一方で、危機的状況への言及は、哲学の統一性に関する多くの言説においても登場している。この時期は、また、哲学の敵に対する度重なる動員によっても特徴づけられ、学問の防衛という言葉も流布している。新たな主題の導入や哲学クラスの地位変容を拒否する哲学の擁護者にとって、彼らの敵はソクラテスの敵と同類であり、学問に関する論争は、哲学の敵か味方かという立場の選択に置き換えられる傾向にあった。

しかし、20世紀初頭、大学の哲学者は、哲学の現状に対してしばしば楽観的な診断を下している。大学拡大の状況において、講座の創設、専門雑誌や学会の出現、哲学的論争に対する教養ある聴衆の関心、国内外の哲学会議の増加、政治や教育行政の指導的立場への哲学者の参加、出版市場の発展などがこの分野の成功を示している。フランス哲学についての多くの記述は、その全体の良好な状態の記述によって始められている。ドミニク・パロディは、第一次大戦後に公表された総括で、哲学活動の豊かさを次のように記述している(Fabiani, 1988, p.121)。「過去30年、かつてないほど哲学研究は増加し、真剣で緊張に満ちている。その証拠をあげる必要があるか。外部から、そして客観的に見てさえそうである。雑誌で多くの著者や本のタイトルを眼にすれば十分である。また、1914年の7月まで、わが大学の哲学講座の周りに押し寄せたこのように多くの聴衆、さらに、常に専門家とは限らない読者をもつ多くの雑誌を確認すれば十分であろう」。大学の哲学活動は、再生や再発見という言葉で考えられている。過去はしばしば否定的に描かれ、ヴィクトル・クザンによって樹立された哲学体制が、「学校的」なものとして、とりわけ批判されている。

他方、19世紀末、すでに危機という言葉も広がっており、「哲学の死」という言葉さえ登場している。「個別の自立的学問の拡大が哲学に取って代わっている。すなわち、心理学、社会学、科学論理学、哲学史であり、それらは、物理学や化学がそうで

「紳士」と「学者」

あるのと同じく、中心的な哲学から独立している」(Boutroux,1908,p.688)。哲学研究のこうした細分化に、偉大な哲学出現のための条件の消滅が対応している。指導的立場にあったエミール・ブトルーでさえ、時に、哲学の将来について暗い判断を下している。「おそらく、現在は偉大な独創的創造にとって特別好都合というわけではないだろう。人間精神は、自然科学や社会科学の急速かつ強力な発展に動揺し、その平静を取り戻すのにしばらく時間がかかるであろう」(Boutroux,1901,p.506)。世紀末数年の間に、中等教育の全体的危機という言葉もまた出現している。すなわち、エリートを養成するリセの機能が疑問視され、伝統的人文学の優越性が疑われている。哲学者は、中等教育の内容と目的についての論争の当事者であった。というのも、そのシステムにおける優位な地位のため、改革について助言を求められたと同時に、哲学クラスの内容と組織が全体の論争の隠れた争点のひとつであり、アレクサンドル・リボーの議会調査(Commission de L'enseignement,1899)や1902年の改革にもつながっているからである⁹。

哲学の危機という言葉は、唯心論哲学者の間では、第三共和政以前から頻繁に使用されている。ポール・ジャネの『哲学の危機』(1867)は、唯心論の衰退と実証主義の台頭の時期に出版され、唯心論哲学の復興を提案している。「危機」という用語は、他の哲学との競争の中で自らを維持する際に、19世紀末の唯心論哲学者によっても用いられているが、概して、カトリック思想家が頻繁に使用している。この場合、危機的状況への言及は、実証主義の脅威に晒された伝統的哲学者に見られる特徴である。しかし、危機の言説は彼らだけの専売特許ではない。たとえば、大学社会学の実質的創始者であるデュルケムは、研究の分業に見られる無秩序な形態をたどりながら、哲学は、ますます科学の統一性を保証することができなくなっていると主張している(Durkheim,1893)。つまり、知的分業の進展に伴い、哲学の役割が縮小している。彼にとって、哲学を一般化の主張や文筆上の気晴らし(ディレッタンティズム)に陥らせている危機は、知的分業の病理の結果というわけである。同じく、『現代ドイツ心理学』(1879)の序章で、フランス実験心理学の創始者の一人であるテオデュール・リボーは、科学的心理学の自律性を保証するため、一般概念としての哲学の不適切さを主張している。哲学の危機の言説は、この場合、その知的権威を失墜させる戦略と新たな知の企てに対応している。フランスでは、人間科学の多くは、哲学からの分離として成立している。もし、哲学史を哲学から他の形態の知が徐々に自律していく過程と考えるなら、世紀転換期は、とりわけ危機的状況であるように思われる。しかし、フランスでは、哲学は知の場の中心に留まり続けており、デュルケムやリボーなど、

人間科学の創始者は、哲学共同体に依存することを余儀なくされている。

こうして、唯心論哲学者と実証的学問分野の創始者という場の二つの極にとって、危機という言葉は知的戦略の要となっている。すなわち、唯心論者がそうするように、哲学の新しい動きを知識と道德の基礎の全般的危機に結びつけること、それは、伝統を再興するために、それらの新しい成果を貶める企てなのであり、実証科学の創始者にとっては、逆に、普遍的総合を求める哲学の無力さ（ディレッタンティズム）の主張は、学問的革新を正当化するひとつのやり方なのである。

3 危機の諸相—ドイツとフランス—

フリッツ・リンガーによれば、危機という主題は、フランスだけでなく、19世紀末のドイツ教授層（とりわけ哲学者）においても、強迫観念に近いものであったという（Ringer, 1969）。しかし、ドイツでは、危機の言説は、教育の危機と同時に知識全般、さらには社会全体の文化的デカダンスに向けられている。世紀初頭、ドイツ大学の哲学者は、自らの学問の歴史を没落という流儀で考えていた。すなわち、カントからフィヒテに至る時代が黄金期とみなされていたのに対し、19世紀は哲学的には没落の世紀と考えられていた。リンガーは、こうした危機を定義することの難しさを強調しているが、教育と知の危機に対する告発とドイツ大学の社会的没落との結びつきは確認している。しかし、世紀末「ヨーロッパ諸学の危機」といった一般的用語の下で、フランスの状況をドイツのそれと同一視することはできない。当時、フランスの哲学者は、むしろ否定的に大学哲学の過去を記述している。反対に、彼らは、共和国の大学改革と結びついた知的再生を強調している。理論的対立は、革新された大学から利益を得たという感情ほど重要ではない。したがって、哲学的多様性の確認はアナーキーというよりむしろ、知的分業の結果と考えられている。

事実、大学との関係において、フランスとドイツの哲学は、同じ型の発展を経験していない。哲学の専門化、すなわち、特定の知的活動の独占を自らに保証するような専門家集団の形成は、ドイツではカントの時代に始まっている。アルバート・ウィリアム・レヴィは、カントの企てを「ディレッタンティズムの厳密な研究による置き換え、エッセイズムやサロンのおしゃべりに対する大学教育と学識論文への選好」と定義している（Levi, 1974, p. 237）。哲学専門家の成立は、ドイツでは18世紀まで遡ることができ、大学の発展と関係している。すなわち、哲学の専門化は、専門用語の成立（カントは作家でないことに誇りをもっていただという）や知的生活の社会的側面との切断によって記されている。カントの時代は、新しい教授的生活スタイルが誕生した

「紳士」と「学者」

時代である。他方フランスでは、哲学の専門化は19世後半に進展している¹⁰。

こうした違いによって、危機という言葉は、二つの国で同じ社会的意味をもたない。この点で、世紀転換期のヨーロッパ・インテリゲンチヤの全般的危機という表現は、現実を正確に示すものではない。実際、第三共和政のフランス大学哲学に関して、危機という用語を使うことは、いくつかの理由から留保が必要である。第一に、社会的オプティミズムが、彼らの社会的出自と教育的軌道との関係で、教授層にかなり共有されている。哲学教授は、しばしば知的プチブルや中間ブルジョアジーの出身であり、それらの集団はとりわけ、共和国のメリトクラシーの恩恵に浴している。次いで、大学改革が進行中であり、近代的大学の使命が認識され始めている。最後に、哲学者の社会的役割が拡大している¹¹。さらに、世紀末の文化的危機の主要な要素のひとつである、文学の場で見られる非合理主義や反知性主義の流行（それはまさに教授と作家の対立軸のひとつである）に立ち向かうという点で、多くの哲学者は一致している。たとえば、デュルケムは、アグレガシオン準備学生に見られる文学的神秘主義の傾向を非難している（Durkheim,1895）。さらに、『道徳・形而上学評論』の哲学者は、反実証主義の配慮に突き動かされながらも、自らの活動を理性の旗の下においており¹²、ベルクソン自身、右翼の反-知性主義の若者から思想的指導者として祭られていたが、非合理主義の非難に絶えず自己弁護していた（Fabiani,1988,p.130）。ソルボンヌに敵対する右翼知識人が広めようとした、哲学の敵（筆頭はデュルケムと社会科学の指導者、第二にカント主義者）と哲学の革新者（主要にはベルクソン）との対立は、大学の哲学共同体の現実の状況には、おそらく対応していない。哲学的論争の激しさによって、次の事実が忘れられてはならない。すなわち、両陣営はその敵対関係によって、大学人にのみ限定される論争の正統的空間を確定していたということ（Bourdieu,1976）。

したがって、哲学が置かれた危機の状態について、多くの主張がなされたにもかかわらず、フッサールが危惧したように、哲学は、今日、懐疑主義や非合理主義、神秘主義に陥る脅威に晒されているという予想は、フランスの状況には妥当しない。フランスにおいて、危機という言葉は学問崩壊の脅威を示すものではない。事実、実証科学の支持者は、形而上学からの切断を主張したが、決して哲学の場を去ろうとしていない。学問の危機は、したがって、フランスではドイツより限定されたものであった。

4 哲学の相対的地位下落

もし、全体的な文化の危機や哲学の場のアナキーという見方を放棄するなら、危

機という言葉説を、哲学が教育システムのうちで占めている地位の変容と関係づけることができる。哲学は伝統によって、フランス教育システム内で高い地位を占めている。その伝統的定義における哲学（分類し、判断し、総合すること）と哲学者が大学で保持する地位との間にひとつの相同性がある。すなわち、学問の完成=戴冠には、教育のそれが対応している。この特権は、哲学そのものうちにはではなく、当該システム内の学問間の力関係に依存している。さらに、哲学者は、システム内でかつての力関係に応じた地位の表象を維持するよう促されている。しかし、哲学のヘゲモニー空間は、個別科学が自律化するに従って縮小し、その審判権力も弱体化する傾向にあった。それでもなお、完成=戴冠という言葉説は、19世紀末、この学問の審判権力という虚構を広め支持することによって、哲学が教育システム内で高い地位を維持することに寄与している。いくつかの特徴がこうした哲学の優位性を象徴している。たとえば、現在でも、コンクール・ジェネラルやバカロレアの哲学試験、哲学アグレガシオンの試験結果は、公式の報告書で先頭に置かれ、哲学講座の教授名も同様である。同じ序列は、生徒の成績表や学期ごとの調査書にも見られる。

第三共和政初期からの高等教育の発展は、伝統的に哲学に結びつけられてきた特権を疑問視するという間接的影響をもたらしている。学問ヒエラルキー内で哲学が享受している優位性の多くは、大学の未発達によって、リセ哲学クラスの重要性が維持されていることに起因していた。高等教育が発達すればするほど、最終学年と結びついている哲学は、ますます地位下落する傾向にあった。高等教育にあっては、哲学はひとつの専門分野であって、完成=戴冠の学問ではない。したがって、高等教育での研究が相対的に未発達であることが、哲学の伝統的形態の没落を遅らせてきた。ブトルーがこの時期、哲学部の創設を提案したのは、普遍の名において、哲学が大学において中心的な役割（「大学の良心」）を果たすことによって、その伝統的地位を保持するためでもある(Boutroux,1901)。さらに、哲学をすべての教育に妥当するひとつの「普遍的教授学」に、あるいは、哲学教授を「教授職の教授」にしようとする野望のうちにも、同じ考えが反映されている¹³。

教育システムの歴史のある時点で、ひとつの学問が実際にどのような地位を占めているのか正確に測定することは困難である。世紀転換期における哲学の卓越性に対するほとんど脅迫的な主張は、おそらく、学問間の関係の再定義やひとつの専門から期待できる象徴的利潤の再配分を前にした、これら教員の不安の表現であろう。高位にある教授は、その特徴として、自らの知的野心を断念し、一般の教授と同列に置かれることにとりわけ抵抗する。哲学の卓越性という主張は、こうした現実と理想との隔

「紳士」と「学者」

たりの表現でもある。

フランスでは、哲学に例外的な力が認められてきた。しばしば、哲学は、第三共和政の公認イデオロギーとさえ見なされている。他方、第三共和政の下で、他の学問も同じくイデオロギー機能を要求している。それは、とりわけ、ラヴィスの主導する歴史学である。教育内容のイデオロギー的・社会的機能という問題は、当時の学問間の争いにおける争点のひとつでもあった¹⁴。イザンベール-ジャマティの研究によれば、この期間、哲学の地位は絶えず低下している(Isambert-Jamati,1970)。逆に、他の学問、とりわけ、歴史学の地位は、大きく上昇している。対象とされた時期の最初、歴史学は「補助的な内容」であったが、世紀転換期にはすでに、高位の学問となり、共和国の大歴史家は、大哲学者とほぼ等しい権威を享受している。大学改革は、ランソンと文学史の事例に見られるように、歴史学を人間科学のひとつのモデルとしている。ある場合に、歴史学は哲学史におけるモデルとしてさえ役立っている。こうして、哲学者が自らの学問の将来を不安気に考えていたのに対し、歴史家は自らの領域の発展を楽観視していた。哲学は以後、歴史学を常に意識しなければならなかった。というのも、それは、哲学固有と思われた役割（道德教育、社会的統合の探求、総合、他の学問のモデル）を要求したからであると同時に、「学識者」としての歴史家のイメージが、哲学者のそれと競合関係に入っているからでもある。哲学と歴史学の競合は、ノルマルでも現れている。そこで二つの学問は、最も有望な生徒の獲得競争を演じている(Sirinelli,1988,p.117-135)。哲学は、こうして、高等教育に及ぼされた変容によって、その重要性を徐々に喪失したように思われる。こうした地位の相対的下落は、多くの哲学者のうちに危機という感情をもたらした要因のひとつともなっている。

5 中等教育改革と哲学

世紀転換期、中等教育で哲学クラスの是非をめぐる論争は恒常的であった。最も激しかったのは、1902年の中等教育改革の時点である。しかし、哲学クラスの廃止を主張する者は、非常に少数にとどまっている。他方、この期間の哲学教育プログラムの変化を考えるなら、重要な切断や革新はほとんど見られない(Fabiani,1983)。

1894年、フェルナン・ヴァンデランは、「哲学—廃止すべきクラス—」という刺激的なタイトルの論考を公表した(Vandérem,1894)。彼は、哲学教育の「犠牲者」という自らの経験を引き合いに出しながら、三つの論拠を提示している。第一は、教科という形態で真の哲学を教えることの不可能性である。「すべてはこの問いをめぐる。そのタイトルそのもの、その馬鹿げた言葉の対、すなわち、哲学—教育 (p.

7)」。第二は、哲学クラスに関するものであり、数ヶ月ですべての西洋思想を、「古代から今日に至る哲学宮為の国際展示場のカタログ形式で (p.9)」生徒に強制するものである、と批判されている。最後に、哲学教育の非効率性を非難する。「50名の生徒のうち、5名は理解し、5名はどうかこなすが、残り40名は、ぼんやりと無関心のまま取り残される (p.14)」。この評論家によれば、哲学教育のこうした失敗は、二つの原因によって説明される。すなわち、一年という短期間への哲学教育の集中と、「未熟な精神」の生徒には過大な哲学教授の「高尚さ」の二つである。著者によると、二つの解決法がある。哲学教授を本来の場所(高等教育)に置くこと、及び、哲学教育を中等教育全体に「配分し、分割し、段階を踏ませること」の二つである。

この論考は、哲学教授団の側に激しい反応を引き起こした。ヴァンデランは、哲学に大きな敬意を抱いていることを明言し、決してその死ではなく、ただ改善を望んでいるのだと自己弁護している。教育システムにおける哲学クラスの有害な性格を主張し、その結論に賛意を示したガブリエル・モノーと、多くの生徒は哲学教育にうんざりしているとみなしたテオデュール・リポーの二人を除いて、多くの哲学者は、その論考に反対であった。哲学者の防衛は、二つの観点からなされている。哲学教育の完全な教育的成功、およびこの教育の自然な場所、すなわち最終学年にあることの必然性、の二つである。しかし、哲学に好意的な人々でさえ、中等教育のこの教科が遭遇している困難さは認めている。おそらく、この論争の激しさは、自らの学問について、哲学教授側の過敏症を示しているだろう。そこでは、自らの学問を防御することは、特殊な教育装置の維持と同一視されている。哲学的論証の断片化の不可能性は、もはや、哲学的教授言説の常套句となってさえいる。

1902年改革の中心は、近代部門の古典中等教育への統合からなっている。この改革は、周知のように、古典文化の独占的支配に終止符を打つものであった。以後、ラテン語もギリシャ語も学ぶことなくバシュリエになることができる。近代部門のバシュリエは、すべての学部に入學できる。近代バシュリエは、19世紀末、古典中等教育生徒数が停滞し、逆に、専門的中等学校や宗教コレージュ、高等小学校の生徒数が急激に増加したことの結果である。同じくこの時期、教育システムを経済の新たな要請に適應させる必要性も強調され始めている (Morazé, 1957)。改革に先立って、アレクサンドル・リポーによって大規模な議会調査が行われた。議会で証言した哲学者は、多数が古典教育と近代部門の完全な区別を維持する側についている。他方、歴史家はより改革側に多い。哲学教育は、調査の主要目的ではなかったが、哲学者だけが、その教育の重要性と効果を強調するために、哲学について語っている。彼らの主要な提

「紳士」と「学者」

案は、教科の現状維持に向けられている。注目すべきは、ブリュンチエールのような非-専門家が哲学クラスに賛辞を捧げていることである。三名の大学人だけが、リセの哲学教育を完全に批判している。しかし、それらの批判は、委員会のうちに大きな反響を引き起こさなかった。

哲学者が1902年の改革に批判的であったのは、この改革が哲学クラスを経ることなく法学部や医学部に入学する可能性を与え、哲学の地位を貶めることにつながるからである。事実、最終学年前の4部門の区分(A:ラテン語-ギリシャ語、B:ラテン語-現代語、C:ラテン語-理科、D:現代語-理科)は、哲学から多くの優秀な生徒を奪ってしまった。たとえば、1910年の志願者の割合は、A:19%、B:25%、C:22%、D:34%となっており、セクションCとDは数学の最終学年につながっているため、改革は哲学クラスの募集に否定的な影響を及ぼした(Isambert-Jamati,1969,p.50)。つまり、理科に優秀な生徒が流れ、その「落ちこぼれ」が哲学に流れ込んでいる。哲学の地位下落の印象は、ギュスタヴ・ベローによっても確認されている(Belot,1902)。彼によれば、哲学は「ギリシャ-ラテン教育の完成」であることをやめ、生徒の親は近視眼的な功利主義の態度を示し、子供を金儲けにつながる課程に押しやっている。こうして、哲学の没落という感覚が、多くの哲学教員に共有されている。1902年の改革は、結果として、教授団のうちに哲学の防衛意識を強化するのに寄与している。

6 哲学者の自意識の変容

哲学の防衛は、ただ完成=戴冠のメタファーの再認によってなされただけではない。制度的変容によって哲学の優越した状況が疑問視されるとき、頂点にあるということを繰り返すだけではもはや十分でない。哲学者は、哲学クラスについて自問し始めている。ジュール・ラシュリエは、リボー委員会の証言において、「哲学は、基本的には高等教育の内容」であり、もし哲学クラスがリセの枠内にとどまることができるとしても、それはただ「あまりに早く、学生生活を始めさせないがため」である、と述べている(Commission de l'enseignement,1899,p324-28)。ギュスタヴ・ベローもまた、1年間に教育が集中していることは、おそらく不都合なことであろうと主張している(Belot,1902,p359)。高貴な学問の定義によって教師が自らを研究者とみなすようになる、という事実は、エミール・ブトルーによって検討されている。すなわち、哲学教授は「自らのクラスを部分的には自分自身の為のものとし、生徒を学識研究に導いており」、その結果、「中等教育に高等教育を導入する」傾向にあると(Commission de l'enseignement,1899,p336)。リセの哲学教育は「基礎的」でなければならな

いと主張することで、ブトルーは、少なくとも暗示的に完成=戴冠のメタファーを疑問視している。フェルナン・ヴァンデランは、哲学教師を教育者であるよりも学者でありすぎると、役割の混乱を非難している。この批判は、大学人によっても取り上げられている。「あまりに学識者でありすぎるため、生徒に、その場がリセにない実験心理学のような特殊で複雑な研究を与えたがっている」(Bernès,1901,p47)。哲学クラスの詰め込み主義への疑問は、ここでは、リセへの実証科学の導入に対する予防策のように思われる。しかし、それはまた、高位にある学問のパラドクスをも示している。中等教育の哲学教授は、自らの活動を学識ある哲学者のそれと同一視する傾向にある。こうした自己意識は、小規模で同質的な哲学共同体の存在によって強化されている。しかし、その意識は、リセでの日々の平凡な教育活動によってますます否認される傾向にあった。学識者的定義と教育者的定義との緊張は、高貴な学問の代理人を特徴づける野心からきている¹⁵。こうして、哲学クラスの現状維持の必要性を再認することの背後に、哲学の優位はもはや虚構に過ぎない、という哲学教授層の不安を見て取ることができよう。

多くの哲学教授は、哲学はそれにふさわしい場所を社会で与えられていないことにも不平をもらしている。哲学の聖人伝が期待させるものとは逆に、思想の師(メートル)は常に尊敬されていたわけではない。マルセル・ベルネスは、哲学教育が遭遇している障害を説明するため、多くの家族の過度の怠慢と誤った配慮を告発している(Bernès,1901)。そこでは、世論は哲学に対して、いつも皮肉っぽく、反感をもち、懐疑的であることが嘆かれている。こうした不信は、哲学の一般的イメージが反体制と結びつけられているという意識からきている。共和国教授の状況をソクラテスの状況と同一視する者さえいる。「多くの者は、よこしまな意図なしで、しかし現実についての無知から、哲学は虚しく曖昧な、あるいは、危険でさえある学問だと思い続けている(というのも、父親には多くのアニトゥスやメリトゥスがいるから)。彼らは、哲学を恩恵として受け取るよりむしろ、必要性によってそれに従っている」(Belot, 1902,p358)。ここでは、親の功利主義が激しく告発されている。

1902年の改革は、教育課程の専門化の必要性和経済への適応を強調するイデオロギー的環境で行われた、という事実を念頭に置けば、親の告発のうちに、哲学者とブルジョアジーとの葛藤を見て取ることができる。哲学の地位を疑問視する自然科学の発展と学問の争いの激化によって、哲学教授は、ブルジョア家族の「誤った」教育選択への憤りを表明しているよう思われる。そこに、自らの学問の社会的地位について、哲学者が抱く意識の変容が現れている。すなわち、共和国公認のイデオログ(「世俗の

「紳士」と「学者」

司祭や説教師)」という社会的使命が、厳密な知的活動のために後退している。たとえば、ビネーは次のように指摘している。「多くの哲学者にとって、哲学はひとつの知的作業であって、生徒の知性を働かせるための手段、ある種のスポーツである」(Fabiani,1988,p.149)。ブルジョア社会では、哲学者はもはや、頂点というより周辺的なものとして自らを意識している。さらに、ブルジョア家族への批判を通じて、批判的活動としての哲学という表象の端緒も見ることができる。つまり、国家公認のイデオログから批判的知性への変容である¹⁶。

7 教会による哲学の利用

哲学についての論争は、大学外でも行われた。奇妙なことに、そこでは、現状維持の擁護者と改革者との入れ替わりを確認できる。もっとも執拗な哲学擁護者は、作家、聖職者、カトリック大学人であった。改革者はむしろ、哲学教授団の一部にみられる。この明白なパラドクスは、どのように説明できるのだろうか。教会にあって、哲学は異教と結びつけられており、長く抑圧の対象とされてきたが、19世紀後半、カトリックによって再び公認されている。レオ13世は、しばしば「哲学法王」と呼ばれており、「キリスト教への入門」として、哲学分野の重要性を認めていた。トミストの再生もまた、カトリック大学の動きによって世紀末に活発化している。聖職者の哲学的養成が重要性を獲得し、教会上層部によって、知的ヘゲモニーを取り戻すための手段として考えられている(Sapiro,2004)。したがって、カトリックが、とりわけ、教権主義に対する武器であったはずのクザン主義の哲学教育に関心を示したことは驚くべきことではない。さらに、19世紀末に拡大しつつあったカトリック中等教育(ジェズイット・コレージュ)は、エリート選抜のための基幹学問である哲学に無関心であることはできなかった。

デュルケムは『フランス中等教育史』の中で、「奇妙な急変」について言及している。それは、革命以降の人文主義と教会の同盟であり、この同盟は、古典古代の精神とキリスト教のそれとの自然な対立からみて、摂理に反することが指摘されている。彼は、この急変に続いて、保守的人文主義と進歩的科学主義という両極の対立がどのように構成されたのかも明らかにしている。すなわち、「社会的、政治的分野と同じく宗教的分野においても、伝統主義の代表者は、誤っていたか否かは別として、伝統的文学教育に、彼らには聖なる教義と思われるものの最良の補助を見出した。他方、反対に、科学教育は彼らには疑わしく思われた。そのため、あらゆる方面の自由主義者はこれと反対の立場をとる傾向があった」(Durkheim,1938,613-14頁)。デュルケ

ムがまた「奇妙な同盟」と呼ぶこの「奇妙な急変」は、哲学にも適用できる。しかし、この同盟は、遅れて19世紀後半に起こっている。

第三共和政下、哲学はカトリックによって人文学全体のうちに統合され、その教育原則は厳格に守られた。カトリック教育の生徒向け季刊誌『哲学におけるリセ生徒』の巻頭に記された宣言は次のようなものであったという(Fabiani,1988,p151)。「主要な試験すべてで、哲学必修プログラムの維持を完遂すること」。それは、生徒に「一步一步、一問一問」バカロレアの哲学プログラムに従い、「自宅で説教を」提供することでもある。「若者に哲学を提示するやり方において、公式プログラムの製作者と神学者の間に不一致は存在しない」。教会の企図は、革新された強烈な反実証主義的唯心論を中心に、大学と聖職者教員を和解させることにあった。右翼知識人のシャルル・モーラスは、この雑誌で、哲学教育を擁護し、それを脅かす敵を告発している。彼によれば、哲学教育の存在は、「自然主義」(「学識の野蛮」)の侵略に対する保障である。「古典教育の統合された一部であった哲学は、独立した科学となるかもしれない。それは、熱狂的信者を手にするだろうが、すでに文法学生の特権や思い上がりとなっているラテン語詩のように、多くの者から遠ざかってしまうだろう」(Fabiani, 1988,p152)。人文学の名において哲学を擁護することは、哲学クラスを古典教育の伝統的システム、そして唯心論イデオロギーに結びつけることでもあった。かつて、世俗の哲学教育に敵対的であった聖職者は、以後、自らの影響力の基礎となりうる教育装置の維持を求めている(「哲学は神からのもっとも偉大な恩寵である」)。カトリックによる哲学擁護の熱狂は、おそらく、それを人文学の伝統全体の中に統合し、社会-科学の言説を「野蛮な」唯物論の世界に投げ捨てるのに寄与したと思われる。

8 哲学の「革新」

哲学教育の内容と形式を変えようとする人々はむしろ、大学人や学識官僚である哲学者の側であった。こうした事態は新しいものではない。クルノーはすでに、中等教育における哲学クラスの有効性に疑問を呈し、「哲学の土台」(形而上学、存在論、心理学、イデオロギー)は、学説間の葛藤によって基礎的教育が実践できないので、この段階で教育することはできないと主張しており、ルイ・リアールもまた、哲学の裏切り者であり、それを高等教育に制限しようとしたと非難されている(Fabiani,1988,p153)。新しい分野(心理学、社会学)の創設に参加した大学人は、哲学教育の現状を批判し、改革を提案する傾向にあった。哲学クラスの不毛さという主題は、19世紀末、多くの哲学者の記述の中に現れている。最も激しい攻撃はアルフレッド・エスピ

「紳士」と「学者」

ナスからのものである(Espinas,1884)。批判の第一は、弁証家と形而上学者の過剰生産である。すなわち、彼らの社会的効用は明らかでない。次いで、哲学はカトリック教育の占有物と化している。「修道会の生徒は哲学で優秀な成績を収めている。したがって、そのことが私を不安にする」。最後に、その教育内容は、重要な学問的革新にもかかわらず、1860年代以来、変化が見られない。彼によれば、哲学を文明史の教育に置き換えることが必要である。そのみが、哲学が果たしえなくなった使命を保証することができる。彼の批判は、アグレガシオンという哲学者養成の中心的制度にまで及んでいる。「それは厳密に言って、科学的試験ではない。そこでは、何はともかく、威厳ある教授の態度、秩序正しく構成し、明晰に発言し、ニュアンスを見つけ出し、すべての粗野を避け、声の調子に見られる権威を慎み深さと形式の繊細さに付け加えること、そうした態度を証明しなければならない」(Espinas,1884,p585)。そうした見方からすれば、科学的哲学の学校で教育された志願者は、重苦しさや趣味の欠如を露呈してしまう。哲学で実際に支配的なのは趣味(*goût*)であるとエスピナスは断言する。デュルケムの批判もまさにその点にある。社会学の創始者にとって、哲学の危機は非常に現実的であるが、次の事実からもたらされている。すなわち、その制度は、教育システムに特有の自己保存の欲求によって、クザンによって創設された特殊な社会的条件の後も生き延び、その内容とイデオロギー機能を剥ぎ取られ、哲学は純粹に形式的なものとなっている。「哲学教育は、すべての内容を、次いで、すべての実証的対象を剥奪された。それ以降、それが遂行できる唯一の教育的役割は、偉大な学説や問題が題材や時々のものでしかない体操によって、知能を柔軟にすることに縮小された」(Durkheim,1895,p128)。教育の形式主義によって、科学は研究対象というよりむしろお荷物となってしまった。デュルケムにとって、哲学の危機は、学説やイデオロギー対立の結果ではない。問題なのは、イデオロギーや哲学的内容の不在であり、そのことがすべての「言葉遊び」を許している。哲学教育に対するデュルケムの批判は、エスピナスのそれと同一である。すなわち、厳密さや忍耐を犠牲にし、趣味や独創性を称揚するディレクティズムへの批判である。しかし、デュルケムは、哲学を廃止することを望まず、科学に基づいて改善することを求める点で、エスピナスと異なる。というのも、哲学クラスは、その目的が若者を社会生活に準備するものであるため、社会的に重要な役割を保持していると考えているからである。実際、哲学教育の内容に関する批判者の企ては、新たな学説や活動の制度化を目指す知的戦略として考えることができる。哲学制度の分析は、デュルケムにとって、社会学の正当性の承認を推し進めるためのひとつの手段でもあった。

しかし、哲学教育の改革の提案は、ほとんど効果をもたらさなかった。異なる立場からであれ、哲学の革新を目指したはずの『形而上学・道徳評論』の編者は、デュルケムの論文に激しく反発している。というのも、彼らは、それを還元的実証主義の宣言であり、哲学そのものへの攻撃と考えたからである。「彼が非難するのは、単に生徒の不注意な小論文だけでなく、教師の講義である。デュルケム氏は、哲学が原理や根本的概念についての科学であることを望んでいる。しかし、根拠であるところのもの、概念であるところのもの、原理であるところのものを知るところを問題として取り上げることは、デュルケム氏の許すところではない」(*Revue de métaphysique et morale*, 1895, p232)。反発の激しさは、デュルケムの提案の慎ましさ（実証的内容の追加）を考えると過剰とも思われる。実際、それは、哲学が引き合いに出されるたびに見られる、哲学者の過敏症のひとつの現れでもあった。

しかし、こうした学派の対立を超えて、現状を維持することについての大学哲学者の間に合意が存在していたように思われる。伝統によって生み出された凝集性、教授たちの自らの過去の教育への執着、さまざまな職業的儀礼からもたらされる満足（行政の助言者、コンクール委員、論文審査、学会）によってもまた、変化がなかったことが説明される。多くの大学哲学者にとって、おそらく、「永遠なる哲学」以外の表象は、望まれていなかったのであろう。哲学固有の普遍なるものへの参照は、教育システム全体を特徴づけ、デュルケムやブルデューがその中に大学的伝統継続の主要因を見出した自己保存の性格を強めている。しかし、こうした「永遠なる哲学」の下で、哲学の危機への多くの言及は、少なくとも、表象レベルでの哲学の変容を示している。世紀転換期の哲学教授は、いくつかのエピソード（アランにとってのラニョー）が伝えるようなカリスマには対応していない。上昇しつつある学問（歴史学や社会学）との激しさを増す競争や、教授上の問題に直面して、その対象や地位への疑念がもたらされている。古くからの完成＝戴冠の比喻への度重なる訴えには、頂点よりむしろ、周辺的なものとしての自意識が隠されている。

注

1. ブルデューによれば、17世紀前半における「社交家」（モンダン）と「学者」（ドクト）の対立は、現在においても文化や教育に対する二つの異なる関係を示している。詳細は、Bourdieu, 1979, 106-117頁を参照。
2. 在野の、とりわけ右翼やカトリック知識人とのイデオロギー的争いの収支は、Sapiro, 2004を参照。なお、「習俗の科学」としてのデュルケム社会学をめぐる社会的論争の詳細は、

「紳士」と「学者」

- A.R.S.S. no.153,2004の特集論文を参照。
3. 第二次大戦後まで継続するフランスにおける社会学と哲学の認識論的關係については、Bourdieu et Passeron, J.C.,1967や1950年代の実存主義全盛の時代における哲学の状況を自己分析の形で論じた Bourdieu,2004 に詳しい。
 4. 拙稿2004・2005を参照。
 5. 教育システムを通じての「国家貴族」の養成は、この二つの伝統的対立の現代的変容を通じて行われているように思われる。シヤンスポやエナを通じて養成される現代的ビジネス・エリートやジャーナリスト知識人は、ブルデューに言わせれば、「紳士」の今日的形態なのである。詳細は、Bourdieu,1989を参照。
 6. 現在においてもなお、こうした伝統が継続していることはPinto,1987で詳細に分析されている。
 7. 世紀転換期のフランスエリート層の全体的布置連関は、Charle,1987を参照。
 8. 哲学の危機に関する言説分析は、Fabiani,1988に詳しい。なお、以下の記述は彼の分析に大きく負っている。
 9. リボー調査における全体的論争の詳細は、Ringer,1992を参照。
 10. サン・シモンやコントなど、学派を形成した19世紀前半の著名な哲学者のほとんどは、講壇ではなく在野で活動している。この時期、哲学教授の多くは、教育プログラムを忠実にこなすだけの復習教師に近い存在であったという。詳細は、Fabiani,1988を参照。
 11. たとえば、共和国の教育改革に辣腕を振るったフェルディナン・ビュイッソンやルイ・リアール、フランス社会主義の大立者ジャン・ジョーレスなど、多くの哲学アグレジェが共和国の重要な社会的役割を担っている。
 12. この雑誌は、事実において思考停止する実証主義と迷信に導く神秘主義に対抗し、スローガンとして「理性の光の下」を掲げていた。
 13. 哲学クラスを「普遍的教授学」にしようとする試みは、この時期、文科の教授エリート養成の場としてのノルマル準備級（カーニュ）の成立によって具体化されている。カーニュは、その内容からみて哲学クラスの延長と考えることができる。フランス知識人の母体となるカーニュの成立とその後の展開については、Sirinelli,1988を参照。
 14. 第三共和政における歴史学のイデオロギー機能については、たとえば、谷川（1997）を参照。
 15. 学識者と教育者の矛盾は、一般化すれば、預言者と司祭の対立の教育版でもある。詳細は、Bourdieu et M. de Saint-Martin,1970を参照。
 16. 次の世代のポール・ニザン(Nizan,1932)が『番犬たち』で痛烈に批判したのも、ソルボンヌに代表される講壇哲学のこうしたイデオロギー機能である。

参考文献

- Belot, G., " La nouvelle situation des classes de philosophie ", *Revue universitaire*, t. II, 1902.
- Bernès, M., *La réforme de l'enseignement secondaire*, 1901.
- Bompaire-Evesque, *Un débat sur l'Université au Temps de la Troisième République*, Amateurs de Livres, 1988.
- Bourdieu, p., "Le champ scientifique ", *A.R.S.S.*, no.2-3, 1976.
- , *La distinction*, Minuit, 1979 (石井洋二郎訳『ディスタクシオン I・II』藤原書店, 1989).
- , *La noblesse d'état*, Minuit, 1989.
- , *Esquisse pour une auto-analyse*, Raison d'agir, 2004.
- Bourdieu, p. and Passeron, J-C., "Sociology and Philosophy in France since 1945 ", *Social Research* 34-1, 1967.
- Bourdieu, p. et M. de Saint-Martin, "L'Excellence scolaire et les valeurs du système d'enseignement français ", *Annales*, vol.25-1, 1970.
- Boutroux, É., "La philosophie en France depuis 1867 ", *Revue de métaphysique et de morale*, 1908.
- , "L'enseignement de la philosophie ", *Revue internationale de l'enseignement supérieur*, 1901, vol.2.
- Charle, Ch., *Les Elites de la République, 1880-1900*, Fayard, 1987.
- Commission de L'enseignement(pres. Ribot), *Enquête sur l'enseignement secondaire*, vol1-2, 1899.
- Durkheim, É., *De la division du travail social*, 1893(田原音和訳『社会分業論』青木書店, 1971).
- , "L'enseignement philosophique et l'agrégation de philosophie", *Revue philosophique*, 39, 1895, dans *Textes 3* présentation de Karady, V., Minuit, 1975.
- , *L'évolution pédagogique en France*, 1938(P.U.F.1969)(小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社, 1981).
- Espinas, A., " L'agrégation de philosophie", *Revue internationale de l'enseignement supérieur*, 1884-1.
- Fabiani, J-L., *Les philosophes de la république*, Editions de Minuit, 1988.
- , "Les programmes, les hommes et les œuvres ", *A.R.S.S.*, no.47-48, 1983.
- 林 芳樹, 「メリトクラシーと教授団 (I・II)」『国際関係・比較文化研究』第2巻第2号, 第4巻第1号, 静岡県立大学国際関係学部, 2004, 2005.
- Ismbert-Jamati, V., *Crise de la philosophie, crise de l'enseignement*, P.U.F., 1970.
- , "Une réforme des lycées et collèges", *L'Année sociologique*, 1969.
- Karady, V., "Durkheim, les sciences sociales et l'Université bilan d'un semi-échec", *R.F.S.*, vol.17-2, 1976.

「紳士」と「学者」

- Levi, A.W., *Philosophy as Social Expression*, University of Chicago Press, 1974.
- Morazé, Ch., *Les bourgeois conquérants*, A.Colin, 1957.
- Nizan, P., *Les chiens de garde*, 1932(海老坂武訳『番犬たち』晶文社,1967).
- Ringer, F.K., *The Decline of German Mandarins*, Harvard University Press, 1969(西村稔訳『読書人の没落』名古屋大学出版会,1991).
- , *Fields of Knowledge*, Cambridge University Press, 1992 (筒井清忠他訳『知の歴史社会学』名古屋大学出版会,1996).
- Sapiro, G., "Défense et illustration de l'honnête homme ", *A.R.S.S.*, no.153, 2004.
- Sirinelli, J-F., *Génération intellectuelle*, Fayard, 1988.
- 谷川 稔, 『十字架と三色旗』山川出版社, 1997.
- Vandérem, F., "La philosophie, une classe à supprimer", dans *Pour et contre l'enseignement de la philosophie*, Alcan, 1894.